

幼児の仲間関係構築に寄与する要因

—相互作用の開始場面の分析から—

松井 愛奈*

1. 問題と目的

幼児期において、さまざまな仲間と多様な相互作用を行い、仲間関係を築くことの重要性は自明である。その構築が不十分であると、その後の社会生活において深刻な問題を抱えてしまうこともある（Asher, Parkhurst, Hymel, & Williams, 1990; Kupersmidt, Coie, & Dodge, 1990）。仲間と思う存分遊ぶ機会が乏しくなっているとされて久しい現代社会において、子どもの仲間関係を育て、支えていくことは、以前にもまして重要な課題のひとつとなっている。

仲間関係を築くために、まず前提として必要なのは、仲間との相互作用である。相互作用がなければ、相手と知り合いになることは出来ない。一方的に相手の顔や名前のみを知っていても、その相手と知り合いであるとは言えない。仲間と相互作用を積み重ね、活動や感情を共有し、お互いに相手を知ることを通して一緒に遊びたい仲間が生まれてくる。そういった仲間との相互作用を遡ると、必ず相互作用を開始するに至った何らかのきっかけがある。つまり、「仲間との相互作用の開始場面」がなければ仲間との相互作用は始まらない。「仲間との相互作用の開始場面」があり、「仲間との相互作用」が成立し、相互作用を積み重ねて「仲間関係」の成立へと続いていくのである。

幼児がどのようにして仲間と相互作用を開始するのかについては、仲間との遊び開始の分析として、仲間入り場面に焦点を当てた研究が行われてきた。仲間入

* MATSUI, Mana 本学社会福祉学部准教授 博士（人文科学）

り方略の種類 (Corsaro, 1979; Forbes, Katz, Paul, & Lubin, 1982; Holmberg, 1980; Shugar & Bokus, 1986) や、仲間入りの成功率 (Corsaro, 1981, 1985; Garvey, 1984; Putallaz & Wasserman, 1989)、社会的地位 (Putallaz & Gotman, 1981a; 1981b) や友達関係 (Sawyer, 1997; Shibasaka, 1988) との関連、性差 (Black & Hazen, 1990; Forbes et al., 1982; Sawyer, 1997)、遊び集団への参加と統合という2段階から遊び集団側と仲間入り側の情報伝達の様子 (倉持, 1994) などが検討されている。

さらに、幼児が仲間と一緒に遊び始めるのは仲間入りを通してだけではない。まだ遊び集団が出来上がっていない状態、あるいは遊び集団から一歩出た状態における、遊び集団とは関係のない仲間との相互作用が多くある。そこで、ある特定の場面に限定することなく、幼児が自由に活動している状態全てを考慮に入れて、明示的・暗黙的双方の側面から仲間との相互作用の開始場面を詳細に検討し、年齢による発達的变化 (松井・無藤・門山, 2001)、遊び場面との関連 (松井, 2001a)、個人的要因 (松井, 2001b)、暗黙的方略の特徴と発達的变化 (隅田 [松井], 2003) が捉えられている。

そのようなさまざまな影響を受けながら、仲間との相互作用を開始する働きかけが行われると、それに対する仲間の反応がある。働きかけが仲間に拒否されたり、気付かれなかったり、あるいは承認されても働きかけた本人がその場から立ち去ったりすれば、仲間との相互作用が成立しないこともある。しかし、働きかけが承認されると仲間との相互作用が成立する。その後、相互作用の連鎖 (Van Lieshout, Cillessen, & Haselager, 1999) によって、仲間とのコミュニケーションが図られる。そのコミュニケーションは、長時間に渡ることもあれば、ごく一時的、短時間に終わってしまうこともある。ここで問題にしたいのは、長時間であれ短時間であれ、そういったコミュニケーションがあるからこそ、相手と知り合うことが出来るということである。裏を返せば、相互作用がなければその相手と知り合うことは出来ないのである。

本研究では、仲間との相互作用の積み重ねを通して仲間関係が築かれていくという立場を取り、仲間と知り合い、仲間関係を築いていくプロセスの最初の段階として「仲間との相互作用の開始場面」を位置付ける。そしてこれまでに見出された枠組みや知見 (松井2001a, 2001b; 松井・無藤・門山, 2001; 隅田 [松井]、

2003) を統合しつつ、仲間との相互作用が開始され成立していく場面の分析を通して、幼児が仲間関係を築くことに寄与する要因を探る。分析の対象となる事例の選択には、以下の2点を考慮する。第1に、子どもの年齢である。年齢とともに、一緒に遊びたい仲間を自分の方へひきつけることが増加する(松井・無藤・門山、2001)。そこで、一緒に遊ぶことの多い仲のよい関係やグループがはっきりしてくるなど、仲間との親密度が深まっていると考えられる5歳児の事例を取り上げることで、仲間関係が築かれていく様子や特徴を検討することが出来るだろう。

第2に、方略の明示性と暗黙性である。明示的な働きかけは、定型性が高く、働きかけに対する相手の反応はルーティン的である(隅田 [松井]、2003)。そのため、相互作用の成立は比較的容易、かつ、定型的であり、外部の者から見ても相互作用の開始場面の展開は予測が付きやすい。一方、暗黙的な働きかけについては、働きかけに対して多様な反応が可能であり(隅田 [松井]、2003)、相互作用の展開はその場の状況次第で変わってくる。そして、幼児は仲間との相互作用を開始する上で、暗黙的方略を多く使用している(松井・無藤・門山、2001; 隅田 [松井]、2003)。これらのことから、暗黙的な働きかけによって仲間との相互作用が開始され、仲間との活動が成立していく事例を取り上げる。

以上の2点を同時に満たす事例、つまり、5歳児において、暗黙的な働きかけにより仲間との活動が成立する事例を取り上げる。その事例をもとに、子ども達の関係性や前後の文脈を考慮しつつ、質的な分析を通して詳細に検討する。

2. 方法

(1) 対象児

都内私立幼稚園園児。この幼稚園はクラスの枠にとらわれない遊びを中心とした保育を実施しており、3、4、5歳児クラスが各1クラスで、全園児数は約45名である。保育者は担任3名と、フリーの保育者2名の計5名であり、園長も保育に参加している。

(2) 観察時期

分析の対象となった事例が含まれる時期は、1999年4月～2001年3月、観察頻度は2週間に1回、月2回程度である。総観察時間は、約86時間である。なお、本研究の対象となった時期以前から数年間に渡って継続的にこの園で観察を行っており、以下の事例に挙げた5歳児は、3歳児クラス（子どもによっては4歳児クラス）への入園当初から見ている子どもたちである。また、本研究の時期以後も定期的にこの園を訪れ（2004年7月まで）、保育の様子を観察すると同時に、観察の内容をフィードバックし、保育者と話をする機会を得ている。

(3) 手続き

保育に参加しない観察者の立場を取り、VTR撮影による自由遊び場面の自然観察を行った。園全体の様子が把握出来るよう考慮しつつ、観察に行ったその日に観察する場面や子どもを決め、1日に複数の場면을撮影するという形式である。撮影時間は、登園からお弁当前までであった。

(4) 分析方法

仲間との相互作用の開始場面が生起する部分の言語的音声と動作を詳しく記録した後、松井（2001a）による仲間への働きかけ方略（表1）に分類した。その後、暗黙的な働きかけにより、仲間との相互作用が生まれている5歳児の事例を整理した。そのうち、以下の2事例を選択し、詳細な質的分析を行った。なお、仲間との相互作用の開始場面について、以下のような操作的定義を行う。①ある幼児が1人以上の幼児と新たに関わりを持とうとし、言語的、非言語的を問わず仲間に向けられた働きかけを行う場面である。したがって、働きかけには活動している幼児の集団に加わろうとする、1人の幼児によってなされる試み（いわゆる仲間入り）に限らず、他の子どもを自分の活動へ誘い入れようとする試み、および、一時的なやりとりで終わる可能性もあるような、あいさつや呼びかけ等も含む。②仲間への働きかけをした際、仲間から拒否されるか、あるいは反応が得られず再び働きかけを試みる場合、同じ方略を繰り返しても、その試みは新たな別の試みと捉える。

表1 仲間への働きかけ方略

●自分	自分の活動へ相手を誘う。自分に相手をひきつける。
(1)明示	明示的 [*] に、相手を自分の活動や新たな活動へ誘う。 例) 積み木を組み立てている子が「(積み木) 一緒にやろう」 「一緒に遊ぼう」
(2)暗黙	暗黙的 ^{**} に、相手を進行中の自分の活動、新たな活動へ誘う。 自分の活動の提示。自分に注意をひきつける。 おしゃべり。呼びかけ。あいさつ。 例) お店屋さんごっこをしている子が、「いらっしゃいませ」と店員の役で声をかける。 「ブランコしよう」ではなく、「ブランコあいてるよ」と言う。 土だんごを見せる。仲間の背後から抱きつく。 「昨日、〇〇へ行った」と話しかける。「〇〇ちゃん」「おはよう」
●相手	相手の活動へ働きかける。
(3)明示	明示的に相手の活動への仲間入りを求める。 例) 「いれて」
(4)暗黙	相手の活動に関連した行動で、暗黙的に相手の活動へ参加する。 例) 大型ブロックの組み立てで、必要なブロックを運ぶことにより参加する。
(5)質問	相手のしていることを質問する。 例) 「何してるの？」
(6)模倣	相手の動きを模倣したり、相手について行ったりする。 例) とびはねている仲間のまねをしてついて行く。

^{*} 明示的：相手と関わりを持とうとすることが直接的に言葉で言い表されているため、それが字義通りに解釈可能であり、明確である。

^{**} 暗黙的：直接的ではなく、間接的、婉曲的に表現されている。非言語的に身ぶりで表されているものも含む。

3. 結果と考察

分析 1 一時的な相互作用のつながり、偶然性、当然性

事例 1-1 何ごっこしてるの？

<凡例>

○囲み：O輔・J樹・G之のグループ。◇囲み：H男・P司のグループ。□は相互作用の開始場面に該当する仲間への働きかけを行った子ども。□は仲間への働きかけを行った子ども。下線部：仲間への働きかけ。()内は方略名。点線部：相手の反応。波線下線部／三重下線部：下記の考察にて言及。**は聞き取り不可能。

○輔、J樹、G之 (5歳男児) は、ポケモンごっこをしながら平均台を拠点に活動している。		◇H男、P司 (5歳男児) は、それぞれ2台の三輪車をつなげて (合計4台：前に自分が乗り、もう1台後ろにつなげている)、園庭を走らせている。O輔らが活動の拠点にしている平均台の間やその周りも通る。お互いに相手のグループの活動に目を向けたりしているが、相互作用はない。	
○輔、J樹、G之		◇H男、P司	
○輔 J樹 G之	←	□H男	H男は、テーブルの所にいる3人に三輪車で近付きながら「 <u>ねえ、何ごっこしてるのー？ポケモンごっこー？</u> 」(質問)と聞く(1)。○輔は「うん」と言っ <u>てうなずく</u> 。さらにH男は「**？」と遊びの内容を尋ねると、○輔は「ううん、ちがう、どーんじゃんけんばい」と言う。
J樹 G之			○輔の発話を聞いて、J樹とG之は○輔を見て、J樹とG之は両手を身体の前で上下に振りながら「さいしょはグー、じゃんけんばい」と言っ <u>てじゃんけん</u> をする。
○輔 ↓ J樹			○輔はよいことを思いついたというように、張り切った調子で「じゃあ、ルキアのさー、パーがこれでさー、チョキはこれで、グーはこれで」と身ぶりで示し、普通のじゃんけんではなく、自分が考え出したポケモンのやり方でじゃんけんをするように提案する。G之とJ樹は、○輔が提案したポケモンじゃんけんをする。
		H男 P司	しばらくの間その場にとどまって、ポケモンじゃんけんの様子を見ている。その後、また三輪車で動き始め、2人の活動に戻る。



《およそ5分後》



事例1-2 サファリゾーン

○輔、J樹、G之 は平均台の上にいる。それぞれ「ルキアの赤ちゃん」などと言い、ポケモンの役について話している。<u>H男とP司</u> はそれぞれ2台の三輪車をつなげて、平均台と平均台の間も通りながら三輪車に乗っている。		
○輔 J樹 G之		H男 P司
		H男
		○輔らのいる平均台の目の前にやって来て止まり、後ろから来るP司が追いつくのを待っている。
J樹	→	H男
		「あー、どかーん」と言って、H男の2台目の三輪車に腹ばいによりかかる（自分の活動・暗黙）(2)。
J樹	←	H男
		H男はJ樹を見てJ樹の身体に触れたりする (3)一方で、
		H男 →P司
		「まだ、サーブスエリア**なのね？」とP司を見ながら提案する。P司はうなずく(4)。
J樹		腹ばいの状態から三輪車にまたがるように身体を動かす。
J樹		すぐ後ろの平均台では、G之が○輔に「じゃあーね、おれ、ピチュウの**」と大きな声で言っており、J樹はそちらを向き、○輔はうなずく。
J樹		J樹は三輪車にまたがったまま、「おれ、ピチュウの、3歳」と言って右手の指を3本立てる (5)。それとほぼ同時に○輔が何かを思いついたというように「ねえ」と言って立ち上がり、J樹のまたがっている三輪車のハンドルに手をかけて何か言おうとしかけるが、J樹が話すのを聞いてうなずく。
G之 ↓↑ ○輔		G之は「じゃあおれ、2歳」と指を2本立てながら言い、向き合っている○輔も「おれ*歳」と言う。
G之 →J樹		G之は自分を指差して「1歳」と言い、次にJ樹を指差して「2歳。2歳、2歳」と言う (J樹は気付かない)。
J樹	→	H男
		H男がJ樹を軽く後ろに押すように触れながら、「ちよっとおりて」と穏やかに頼む (6)。
J樹	←	H男
		J樹は少しふざけるような甘えるような感じで「クワー、クワー」とポケモンの役で言って両手を離して軽く上に上げ、顔をH男のほうに突き出し、三輪車にまだ座ったままである（自分の活動・暗黙）(7)。

J樹	←	H男	H男はどこか遠くを見ながら「おりてください、ピッ、ピッ」と言ってJ樹の方に手を伸ばし、J樹も降りて平均台へ移る(8)。
O輔	→	H男	O輔はいいことを思いついたのように、「おれさあ、サファリゾーンにさあ、やろうと思ってたのね、サファリゾーン」と言いながらH男の後ろの三輪車にまたがる(自分の活動・暗黙)(9)。H男は「え?」と言って、O輔を見ながら止まったままではいる。
O輔		H男	O輔は「サファリゾーンに行って**、それでいっこずつ**」と説明する。その発話の途中で、H男はO輔を後ろに乗せたまま、三輪車をこいで進め始める(10)。
J樹 ↓↑ G之			O輔が平均台の上にいるG之に近付いて来ると、G之はO輔の方へ手を伸ばし、O輔もG之の方へ手を伸ばす。O輔は「じゃあ一緒に」と言い(11)、
G之	→	H男	G之は平均台から降りて、O輔が乗っている三輪車の後ろへ行き、車軸に乗る(12)。
J樹			「ピャーッテ、ドン」と言いながら平均台から飛び下りて、彼らの方へ近付く。
J樹	→		「一番上だからここ」と言って、H男とO輔の間に入ろうとし始め(この時点で三輪車は止まっている)、H男の後部2台目の三輪車の車輪の上に立つ(13)。
J樹 J樹 G之			H男は「ちょっと待って待って待って待って」と早口でいう。J樹は降り始め、H男は「それは重いから」と言い、J樹はそのままG之の後ろにつこうとするが、H男は「ふたりはやめて、ふたりは」と少し声を強めて言う。J樹は三輪車から離れる。H男は「ふたりはやめてよ」と落ち着いた調子で言う(14)。
O輔			O輔は「ピーチュウ、ピーチュウ」と言いながら、三輪車から、ちょうど下の緑色のマットの上へ降りて、2、3歩、手を下につけて歩いた後、立ち上がって「じゃ、ここさー、サファリゾーンの草むらね。サファリゾーンの草むら」と言う。J樹もO輔のいる緑色のマットの所に行っちゃがんで軽くとびはねたりする(15)。
G之			G之はH男の三輪車に乗ったままである。
		H男 →P司	H男は三輪車をこいで進みながら「P司くーん!」と大きな声で呼びかけ、少し離れた所にいるP司の方へ向かう。そして、H男は「サファリゾーンだよ、ここ!」と言う。少し離れた所にいるP司も、H男を見て話を聞いている(16)。
O輔 J樹			その後、O輔とJ樹は平均台の所へ移動し、ポケモンの役で向かい合ってやりとりしている。

G之	←	H男	G之はH男に緑色のマットの所で降ろしてもらった様子で、その後O輔らのいる平均台へ向かう。
G之	→	H男	G之は平均台の後ろを通して三輪車で進んで行くH男に「*きねえ、こわすともどっちゃうんだよ」と声をかける。H男は三輪車をゆっくりと進めながら、顔はG之の方を見て話を聞いた後、そのまま三輪車をこいで進んで行く。
O輔 J樹 G之			O輔、J樹、G之はそのまま平均台の所でポケモンごっこを続ける (17)。
		H男 P司	H男とP司も三輪車で連なって進み、活動を続ける (18)。



《約2分後》



		H男 →P司	H男とP司がちょうどO輔らのいる平均台の間にやって来る。H男は、P司に「じゃあ、おりるときはここね、ここね」と言って、O輔らがいる平均台の端の方を指さしたりしている(19)。
O輔			平均台の上に座っているO輔はH男を見て「じゃあまたさー、サファリゾーンに乗って行こうぜ」(自分の活動・暗黙) (20)と言う。
G之 J樹	→	H男	G之とJ樹はほぼ同時に、H男の三輪車に手をかける。結局その三輪車にはJ樹が乗り、G之は平均台の上に移る (21)。
O輔 G之 J樹	←	P司	H男の後ろにいるP司は「乗って誰かー」と言い、O輔が平均台からP司の後ろの三輪車に移る (22)。
J樹 →G之		H男	H男は三輪車をこいで進み始め、J樹は「ばいばーい」と小さな高い声で手を振る (G之は気付かない)。



《約10秒後》



事例1-3 いれて



○輔 G之 J樹	←	H男	H男は「<u>いれて</u>」(相手・明示)と言い、三輪車を止める(23)。H男の後ろに乗っているJ樹は<u>あいさつでもするかのうように片手を上げる</u>(24)。P司の後ろに乗っている○輔はしきりに「<u>ピッチュウ</u>、<u>ピッチュウ</u>」と言っており、H男に対する反応はない。○輔は、“サファリゾーン”の緑色のマットの所で「<u>ピカピカ</u>」と言いながら降りる。
○輔 J樹	← → ←	H男 H男	H男は後ろを見て「<u>ねえねえ、○ちゃーん</u>」(呼びかけ)と声をかけるが、○輔は<u>気付いていない様子</u>(25)。 H男の後ろに乗っているJ樹も「<u>ピチュウ</u>」と言いながら、三輪車に乗ったまま三輪車をがたがた揺らすようにする。その後J樹は三輪車から降りて、サドルの後ろに手をかけ、押し始める(26)。H男は少しあわてたように「<u>ちょっと待って待って</u>」と言うが、J樹はいたずらっぽく笑いながらそのままH男の三輪車を押して進んで行く。H男も微笑みながら、前を向いてハンドルを握る(27)。
J樹			J樹はH男の三輪車を押すのをやめて「<u>ポッカーン!</u>」と言いながら、“サファリゾーン”のマットの所へ駆け寄って来る(28)。
○輔 J樹	←	H男 H男	H男は「<u>○ちゃーん</u>」と言いながら、皆のいる所へ三輪車で向かって来る(29)。 その言葉を受けて、H男の言葉を先取りするように、J樹は「<u>いーれーて</u>」と言う(30)。
○輔	←	H男	H男は○輔の正面まで到着し、「<u>いれて</u>」(相手・明示)(31)と言う。○輔は「<u>いいよ</u>」と言い、H男は「<u>ポケモンの全員、ポケモンの全員でいい?</u>」「<u>じゃあ、あとサトシ</u>。サトシいいい?あとサトシのお父さん。いいい?」「<u>いいい?</u>」、○輔はH男を見てうなずき、H男は「<u>ポケモンを面倒見てる</u>」、○輔は「<u>じゃあサファリゾーンの人にもなってよ</u>」と念を押すように言う。H男は「<u>いいよ</u>」と同意する(32)。
その後まもなく、クリスマス会の練習のため、ホールへ入って行く。			

事例の考察

○輔・J樹・G之は、平均台やテーブルを拠点にポケモンごっこをしている。H男とP司は三輪車をそれぞれ2台つなげて、園庭や○輔らが活動している平均台の間を走り回ったりしている。H男は○輔らに尋ねて、彼らがポケモンごっこをしていることを確認する(1)。その時は、○輔らもすぐにポケモンじゃんけんを始め、H男らもしばらくの間、彼らの様子を眺めた後、三輪車の活動を再開してそ

の場を去る。相互作用は一時的なものに終わり、それぞれのグループの活動へ戻った。(事例1-1)

その後しばらくして(事例1-2)、H男・P司が、O輔らが活動している平均台のすぐ目の前に来る。すると、J樹は「あー、どかーん!」と言って、H男の後部2台目の三輪車に腹ばいになるようによりかかる(2)。これに対してH男はJ樹の方を見たりするものの(3)、P司との活動を続ける(4)。J樹もH男の三輪車の後ろに乗ったまま、O輔らと相互作用をする(5)。その後H男は、J樹に三輪車から降りてくれるよう穏やかに頼む(6)。J樹は少しふざけるようにして、ポケモンの役でH男に働きかける(7)。再度H男はJ樹に三輪車から降りてくれるように頼み、J樹は応じて三輪車から平均台へ移動する(8)。

ここまでの展開において、まず、J樹のH男に対する暗黙的な働きかけ(2)(7)は興味深い。なぜなら、これらの働きかけからJ樹とH男の間は、仲のよい関係であることが読み取れるからである。H男が近くに来ただけで、いきなり「あー、どかーん」と言いながらH男の三輪車に腹ばいになったり(2)、H男に三輪車から降りてくれるように頼まれたとき、ふざけるような甘えるような感じで応答したりする(7)。これらの働きかけを見知らぬ相手から受けた場合、その意味を理解するための手がかりがなく、戸惑うだろう。しかし、それが既知の関係であれば、相手の行動特徴や性格について多少の知識があり、何らかの対応は可能だろう。つまり、これらの働きかけ(2)(7)は、見知らぬ相手に対して行われにくいものだろう。

また、J樹は穏やかで、どちらかというと、おとなしい印象を与える子どもである。幼稚園ではとても楽しそうに遊んでいるが、厳しい口調で話したり、威圧的な態度を示したりする子どもや、大人に対しては少し萎縮してしまう所もあった(これについては、筆者と保育者の見解が一致している)。そのようなJ樹の性格を考慮するとおさら、これらの働きかけは仲のよい関係を前提としたものとして重要な意味を持つてくる。

そしてJ樹は、H男の三輪車に乗ったままO輔・G之と相互作用をしている点(5)も特筆すべきである。主要な活動拠点としては、O輔・G之のグループでありつつ、そこから少し出てH男との関わりも持っており、グループ間を自由に行き来している。ただこの時は、H男はP司との活動を続けようとしているため、

H男とJ樹の相互作用は成立しなかった。

しかし、O輔の働きかけ(9)により、その場の状況は急展開する。O輔はサファリゾーンの考えを提示しながら、H男の了承を得る前にH男の後部2台目の三輪車にまたがる(9)。突然のO輔の提案に対して、H男も「え？」と言うものの、O輔の説明が終わる前に三輪車をこぎ進めて行く(10)。H男は、ただP司との活動を続けるために三輪車をこぎ進めたのかもしれないが、O輔が後ろに乗っていることは気付いているはずである。O輔の説明も終わらないまま、O輔を乗せたまま進んで行っている。O輔とH男は、活動のテーマは共有していないかもしれない。しかし、同じ物(三輪車)と空間は共有している。

そして、H男の三輪車の後ろに乗ったO輔がG之のそばを通ると、G之はO輔の方へ手を伸ばす。O輔は「じゃあ一緒に」と言い(11)、G之もH男の三輪車に乗る(12)。G之もO輔と同様に、H男の三輪車に乗ることには何のためらいもない。それら一連の行動は滞りなく進んだ。G之はO輔と一緒に活動しているメンバーであるため、すでにH男とのかわりが生まれているO輔がそこにいれば、G之もH男との関わりが生じることは、取り立てて注目するほどでもないかもしれない。ただ、それが、何の理由も求められることなく、お互いに暗黙の了解によって受け入れられたことは注目に値する。

O輔の提案から始まったサファリゾーンは、G之にも理解された。そして、O輔とG之の中では、サファリゾーンとH男の三輪車が暗黙的に了承されて結合し、活動が進行していく。そこへJ樹もやって来る(13)。こうして次々と、O輔・G之・J樹の3人がH男のもとに集まることになった。ただし、この時点において、H男はP司と三輪車の活動を行っている状態にある。O輔らと活動をともしないわけではなかった。O輔ら3人がH男の三輪車に乗ってしまうと、H男は三輪車をこぎ進めることが出来ず、3人の行動はH男の活動の妨げになっている。そこで、H男はそれをやめてくれるように頼む(14)。ここでH男の断り方に注目したい。「やめろ」と強く主張し、彼らを排除するわけではない。「待って」「それは重いから」「ふたりはやめてよ」という言い方である。口調も一度強まることがあったが、すぐに穏やかな調子に戻っている。結果的に、H男の三輪車の活動にO輔・G之・J樹が入って来ることを条件付きで認めていると言ってもよいだろう。

この時点においてH男が、O輔らのサファリゾーンというテーマを共有しているかどうかは定かではない。しかしその後、O輔は近くの緑色のマットに降りて、その場がサファリゾーンの草むらであることを宣言する(15)。すると、H男はG之を乗せたまま三輪車をこぎ進め、H男と一緒に活動しているP司にサファリゾーンの存在を伝える(16)。ここで、H男とP司にもサファリゾーンのテーマが伝わったことが明瞭になる。ただし、その後はまた、O輔・J樹・G之(17)、H男・P司(18)の活動に戻った。つまり、この時、事例1-1(1)の後、J樹の働きかけ(2)(7)の後に続いて4度、一時的な相互作用に終わったことになる。

しかし、しばらくして(約2分後)、H男とP司がO輔らの活動している平均台のそばへやって来る(19)。するとO輔が、「またサファリゾーンに乗って行こうぜ」と言う(20)。それを聞いて即座に、J樹とG之はH男の三輪車に手をかけ、その三輪車にはJ樹が乗る(21)。H男の後ろにいるP司も、自分の三輪車に誰か乗ってほしいことを言い、O輔が乗る(22)。先ほど5人の間に認知されたサファリゾーンのテーマが再び復活し、実際に活動に移されることになった。

そうして三輪車を進めてすぐに(約10秒後、事例1-3)、H男は「いれて」と言って三輪車を止める(23)。通例、「いれて」に対する返答としては「いいよ」あるいは「だめ(よ)」であるが、H男の「いれて」に対して、「いいよ」という答えが返ってこない。そのかわりに、H男の後ろに座っているJ樹は、あいさつでもするかのように手を上げる(24)。さらにH男はO輔に呼びかけるが、O輔は気付かない様子である(25)。J樹は「ピチュウ」と言いながら三輪車をがたがた揺らすようにした後、H男の三輪車からおりとサドルに手をかけて三輪車を押し始める(26)。突然のことでH男は一旦「待って」と言うが、J樹は笑いながら押し進め、H男も微笑みながら前を向いてハンドルを握る(27)。しばらくすると、J樹は途中でH男の三輪車を押すのをやめ、O輔らのいるサファリゾーンへ戻って来る(28)。H男も、J樹に少し遅れてO輔に声をかけながら、皆のいる場所へ三輪車をこぎ進めて来る(29)。

ここで特記すべきなのは、J樹の発話(30)である。H男は「Oちゃん」と言っただけであるにも関わらず、J樹はH男の言葉を先取りするかのように、「いいれーて」と言う(30)のである。このことから判断すると、先ほどH男が「いれて」と言った時(23)に、J樹は「いいよ」とは言わなかったが、H男の言ったことが

聞き取れなかった（聞いていなかった）とは考えがたい。また、これまでのH男に対する行動から、H男を仲間に入れたくなかったために「いいよ」と答えなかったとも考えがたい。そうすると、「いいよ」と言うかわりにあいさつでもするかのように手を上げたことは、非常に重要な意味を持ってくる。J樹の中では、わざわざ「いれて」と言わなくてもH男が仲間入りすることは当然認められるもの、あるいは、H男はもうすでに一緒に活動している仲間として捉えられていたのではないだろうか。それだけではなく、H男が「Oちゃん」と呼びかけた後「いれて」と言うことが読めており、H男が言う前に先取りして言うのである。幼稚園や保育所では「いれて」という明示的な仲間入り方略があり、3歳児から4歳児にかけてそれが定着していくが、5歳児においてはルール遊びに参加するために使用する以外は、一緒に遊びたい仲間と関連して用いられる傾向が強まっていく（隅田 [松井]、2003）。ここでもそれが如実にあらわれていると言えるだろう。最終的に、H男は皆の前まで来ると「いれて」と言い（31）、O輔は「いいよ」と認める。H男は、O輔と自分がなりたい役の交渉をして（32）、O輔らと合流した。

事例1-2においては、お互いに近くに来ただけでそれが当然であるかのように相互作用が生まれていた。まさに当然であるがゆえに見過ごされやすく、傍で見る者の目にとまることは少ないかもしれない。しかし、相互作用の成立において見逃すことの出来ない重要な特徴である。相互作用の内容を吟味してみると、暗黙的な働きかけや応答のうち、仲のよい関係を読み取ることが可能なものが多く見出された。同じ暗黙的な働きかけであっても、進行中の活動との関連性が高いもの（例：砂場の活動へ砂を持って行く）や、単に間接的な言い回しを用いたもの（例：「ブランコしよう」ではなく、「ブランコあいてるよ」という言い方をする）であれば、見知らぬ相手にも可能である。しかし例えば、この事例において見られたように、H男が近くに来ただけでJ樹がH男の三輪車の後ろにいきなり腹ばいによりかかるというものは、見知らぬ相手には受け入れられがたいと推測される。

また、事例1-1、事例1-2、事例1-3に特徴的なのは、一時的な相互作用が断続的につながり、最終的に一緒に活動することになったという点である。一度の働きかけによって相手から承認され、その後一緒に活動することになるという連

続的な流れではなかった。活動のテーマの広がりや保持、相互の暗黙的な働きかけにより、一時的な相互作用がつながる形になった。このことを支える要因のひとつとして、自分が現在活動の拠点としている遊び集団があっても、そこから自由に出て他の遊び集団の子ども達と接点を持つことが挙げられる。遊び集団にしばられることなく、集団間を自由に行き来することにより、同じ遊び集団に所属していない仲間との相互作用が生まれたのである。たとえ、その時に生まれた相互作用が一時的であっても、以上の事例のように最終的につながることもあり得る。

事例1-1、事例1-3は特定の仲間を目指して働きかけを行っているが、事例1-2においては、偶然近くにきたという“偶然性”も効いている。偶然性に該当する仲間の数は無数である。しかし、近くにきたからと言って、見知らぬ相手や、相互作用をしたいと思わない相手であれば、相互作用が生まれる可能性は低い。文字通り、偶然近くにきただけで終わってしまうだろう。この近くにきたという偶然性を相互作用のきっかけに変えるには、何らかの働きかけが必要である。もし仲のよい関係にある者同士であれば、相手が近くにきただけでお互いに働きかけ合うことに何の違和感もない。この事例においても、それが当然であるかのように働きかけが生まれていた(2)(9)(20)。つまり、近くにきただけで働きかけを行うことに違和感のない“当然性”があったと言える。そして、近くにきたという“偶然性”と、近くにきただけで働きかけを行うことに違和感のない“当然性”、暗黙的な相互作用が生み出す途切れのない“自然な流れ”(隅田[松井], 2003)が合わさることにより、仲間との相互作用が成立した。そして、それらの結合を支え、促進したのが、彼らの間にあった仲のよい関係である。

なお、実際にJ樹、H男、O輔、G之らは一緒に遊んでいることも多く、この見解は筆者および保育者との間で一致していた。また、H男が「Oちゃんと遊びたいよ」と言うのを観察中に聞いたこともある。したがって、彼らの間には、一緒に遊ぶことの多い仲のよい関係が確かに存在していたと言ってよいだろう。

分析2 志向性：呼びかける、ひき寄せられる

事例2 掘っても掘っても

K香（5歳女兒）とW雄（5歳男児）は、砂場の縁付近で、穴をどんどん深く掘ったりして活動している。F子（5歳女兒）は砂場から離れた場所にあるブランコに乗っている。			
K香	→	F子	K香はF子の姿を見つけ、「おい、F子ちゃん！」（呼びかけ）と大きな声で呼びかけて、F子に向かって手を振る（1）。 <u>ブランコに乗っているF子もK香に気付いて、ブランコに乗ったままK香に向かって手を振る。</u> K香はすぐにまた砂場の活動に戻る。
K香 ↓ W雄			K香はスコップを使って穴を掘り進めながら、「ねえねえW雄くん、これいつまでたっても終わらないよー」と言う。K香に背を向けて、小さな砂山に差した筒型の容器の周りの土を固めるようにしていたW雄は、K香の方へ振り返り、「うそー」と言って穴をのぞき込む。K香は「ほら」と言いながら掘り進める。
W雄			「こんなのあり？」と微笑みながら言う（2）。
K香	←	F子	F子がブランコの所からK香の方へ近付き、「 <u>K一っちゃん！</u> 」と調子をつけるように言って、スキップをしながらかやってくる（呼びかけ）（3）。そして、K香の背後で立ち止まって、K香を見下ろす。 <u>K香はF子が来たことに気が付いていない様子。</u>
K香			「 <u>こんなのありかよー！</u> 」とうれしそうに少し叫ぶように言う（4）。
K香	←	F子	ちょうど言い終わると同時に、F子がK香の背中を左手で軽くたたき「 <u>Kちゃん</u> 」と言う（呼びかけ）（5）。
K香	→	F子	K香はF子を見上げ、「 <u>ねえ、これ、掘っても掘ってもなくならないんだけどー</u> 」と、うれしそうにF子に伝える（6）。W雄もF子を見る。F子とK香は目が合う。
K香			下を向いて、手に持ったシャベルでまた掘る。
W雄			「じゃあ、もっと、掘ってみる？」と言いながら、手で土を触っている。
		F子	K香とW雄の様子を、興味深そうに少し頭を前に突き出して見ている（7）。
K香	→	F子	K香「 <u>F子ちゃんも手伝ってー</u> 」（自分の活動・暗黙）とちらっとF子を見上げて言う（8）。
		F子	シャベルがある方へ場所を移動する（9）。
W雄			にこにこしながら、「じゃあ、じゃあ、じゃあ、地球のうらまで掘ってみるー？」（10）。

K香			「そうだねー」(11)と言いながら手で掘る。
		F子	靴下をひっぱり上げながら「はい、はい」と小さめの声で言って、シャベルを取りに行く(12)。
W雄			「地球のうらまで掘ろっかー」
K香 ↓ W雄			「はやくW雄くんもー、手伝ってー」と下を向いて掘り進めながら言う。W雄は「オッケー」と言ってすぐ近くにある筒型の容器を手にする。
K香 W雄	←	F子	ちょうどそこへ、F子は「これで、ながーいのでやったらどう？」と言って長い赤いシャベルを取って来る(13)。W雄はF子を見る。
K香	← →	F子	F子が、K香らが掘っている穴の上にシャベルの先を持って来ると、K香は「こんなおっきいのだめだよー」と穏やかに言い、F子はシャベルを元の場所へ戻しに行く。K香はF子の方は見ずに掘りながら、「あんまり取れないよ」と言う(14)。K香は「手の方が楽なんじゃない？」と言いながら、シャベルを軽くぼんと前に投げ、手を穴へ突っ込み、「でも届かないよあんまり」と言いながら掘っている。
		F子	「あまりにも届かないんじゃない？」と言いながら、K香と同じ小さい赤いシャベルを持って来て、その後も一緒に活動が続ける(15)。
K香			「あ、やっぱり、掘っても掘っても」(16)。
		F子	「何をさがしてんの？」(17)。
K香			「何をさがしてんのじゃない、奥深く掘ってんのー」(18)と、そんなことも知らなかったのかともいうように、穴に手を突っ込んで掘り進めながら、F子を見ずに答える。
			「だから、地球のうらめがけて掘ってんのー」(19)。
			「そうなんだよー」と穏やかに言った後、「F子ちゃんも**」と言い、さらに手を使って掘り進める。
その後も3人で活動が続ける。保育者を呼んできて自分たちの掘ったものを見せるなど、非常に張り切った様子である。			

事例の考察

K香とW雄は砂場で活動しており、F子はブランコに乗っている。K香はF子の姿を見つけたらしく、大きな声でF子に呼びかけて手を振る(1)。F子も気付いてK香に向かって手を振る。砂場からブランコは比較的距離があり、すぐに相手の活動に気付いたり、声をかけたりすることが可能な距離であるとは言い難い。わざわざ遠くの相手に大きな声で呼びかけ、手を振るという行動からは、K香とF

子の間に仲のよい関係があることが読み取れる。

その後、W雄とK香は、砂場の砂をいくら掘ってもなくなると言いながら、楽しそうに砂場の活動が続けている(2)。そこへまもなく、F子がK香の所へやって来る(3)。しかも、ただ歩いてやって来て、名前で呼びかけるのではない。「Kーちゃん!」と調子をつけるように言って、スキップをしながらやって来る。その前にK香がF子に呼びかけていた(1)せいもあるだろうが、非常にリズムカルな印象である。この点も、ふたりの間に仲のよい関係があることを暗示しているだろう。

K香はW雄との活動でコメントし(4)、それが終わるとほぼ同時に、F子はK香の背中を軽くたたいて呼びかける(5)。それに対して、K香は「ねえ、これ掘っても掘ってもなくならないんだけどー」とうれしそうに言う(6)。呼びかけに対する答えとしては、かなり予測不可能であり、拒否もしていないが、明示的に受け入れることも表していない暗黙的な反応である。

その後、F子がK香とW雄の活動の様子を見ていると(7)、K香はそれが当然であるかのように、F子に手伝いを頼む(8)。F子を自分の活動へ誘い入れているが、F子が参加することに何の異議もないどころか、他に選択肢はないとでもいうような口調であった。F子は特にそれに対して何も言わず、すぐにシャベルがある方へ向かう(9)。言葉による返事はしないが、行動として即座に同意している形になる。そして、W雄が「地球のうらまで掘ってみる?」と言うと(10)、K香(11)、F子(12)ともに言葉によって賛成する。この時点ですでに、F子はK香とW雄の活動に参加していると言ってもよいだろう。

ここで注目すべきなのは、W雄はF子が参加することに対して反対もしていないが、明示的に賛成もしていないということである。つまり、暗黙的に認めている。F子が自分達と一緒に活動することに異議をはさまないのはもちろんのこと、賛成であることをわざわざ言葉で述べることにすら思いつかないといった、F子を自分達の活動へすんなりと受け入れる開放的な雰囲気があった。

その後、F子は長いシャベルで掘ったらどうかと言って持って来る(13)。K香は小さく短いシャベルを使っており、大きいシャベルではうまく掘れないことを言う(14)。それを受けて、F子はK香と同じ小さい赤いシャベルを取って来る(15)。

また、F子はK香とW雄の掘る活動に参加し、同じように掘り始めたが、なぜ

掘っているのか、その目的を理解していなかったという点も興味深い。K香とW雄は、土を掘っても掘ってもなくならないので、「地球のうらまで」どんどん掘り進めること自体を楽しんでいる。そして、K香は土を掘りながら「あ、やっぱり、掘っても掘っても（土がなくならない（16））」と言う。しかしそれに対してF子は、何を探しているのか尋ねる（17）のである。K香（18）とW雄（19）は、そんなことも知らなかったのかとでも言うように活動の内容を告げた。

このようにして、F子はW雄とK香の活動に組み込まれることになった。そのきっかけを遡ると、名前で呼びかけたことである。しかも、ただ名前で呼びかけただけであり、他に何も言わなかった。それにも関わらず、お互いに通じ合い、ひき寄せられるようにしてK香とF子の間につながりが生まれた。見知らぬ相手であれば、そもそも名前で呼びかけることもない。お互いに知っていれば名前で呼びかけることが可能であるが、あまりやりとりのない者同士であれば、あいさつ程度に終わる可能性も高いだろう。名指しで呼びかけたこと、それに答えたこと、ひき寄せられるように近くに來たことは、仲のよい関係を暗示する。そしてその後、K香は当然のようにF子に活動の手伝いを頼む。F子は活動の目的は分からないが、即座に受け入れた。しかもそれは言葉によるのではなく、頼まれた活動に必要なシャベルを取りに行くという行動で示された。このように、言葉によって一緒に活動したいことを明言しなくとも、相互につながり得る。

この事例は、分析1の事例と異なり、一時的な相互作用が断続的につながったものではない。K香がF子に呼びかけ、F子がK香の所へやって来て、K香がF子に活動の手伝いを求め、F子は参加する、という一連の流れがあった。また、事例1-2のように、近くに來たという偶然性もない。相手を特定して呼びかける、あるいは、特定の相手を目指してやって来る“志向性”があり、そのことによって、最終的に相互作用が成立した。しかし、お互いに近くにひき寄せられた後、分析1の事例と同様、仲のよい関係を読み取ることの出来る暗黙的な働きかけにより、相互作用が生まれた。

4. 総合考察

本研究では、5歳児において暗黙的な働きかけによって仲間との活動が成立していく事例をもとに、仲間関係構築に寄与する要因を検討した結果、いくつかの要因が見出された。以下、要因別にまとめる。

(1) 偶然性と志向性

仲間との相互作用の開始場面において、働きかける相手が決まる状況として大きく分けて2つある。偶然近くにきたという“偶然性”が効いている場合と、ある特定の仲間に向けて意図的に働きかけを行うという“志向性”がある場合である。偶然性に該当する相手の数は、志向性に該当する相手の数よりはるかに多い。しかし、偶然近くに来る相手を選べず、それが見知らぬ相手や、相互作用をしたと思わない相手であれば、働きかけを行わないことも多いだろう。

幼児が仲間との相互作用を開始するうえで、目の前にある具体的な物や活動への依存度が下がり、人間関係を強く関連したやり方で働きかけを行うことが増加する（隅田 [松井]、2003）。つまり、3歳児ではその場にある物や目の前で進行している活動に興味を持ち、その物や活動を通して仲間との相互作用が開始されることが多い（隅田 [松井]、2003）が、それは志向性よりも偶然性から仲間との相互作用が生じることが多いことを示唆する。その後次第に、相互作用の積み重ねによって一緒に遊びたい仲間が生まれると、偶然性よりも志向性から仲間へ働きかけることが増加すると予想される。

(2) 偶然性と当然性の結合

先に述べたように、近くにきたという偶然性は、必ずしも仲間との相互作用のきっかけにつながるわけではない。しかし、一緒に遊ぶことの多い仲のよい関係がある者同士であれば、近くにきただけで働きかけることに違和感のない“当然性”があり、近くにきたという“偶然性”と結合して仲間との相互作用が成立する。

相手の顔も名前も知らない未知の相手同士では、相手と共有出来るものが何もない。そのため、よほどの必要性がない限り、お互いに働きかける可能性はかな

り低いだろう。それに対して、多少なりとも相手のことを知っている既知の相手同士であれば、あいさつを交わしたり、何らかの共有経験をもとに話しかけたりするなど、働きかけを行う可能性は未知の相手同士よりも高まる。このことから推測すると、一緒に遊ぶことの多い仲のよい関係が築かれていき、相手との親密度が深まるほど当然性の度合いはより強まり、偶然性と当然性はより結合しやすくなると考えられる。その結果、偶然性から仲間との相互作用が成立する。そのことはつまり、仲間との相互作用を成立させる上で偶然性も利用出来るということであり、それだけ仲間との相互作用を持つ機会がより増大するということである。

(3) 仲のよい関係に支えられた暗黙的な相互作用

本研究で検討した事例においては、相手と関わりたいことが明示的に表されない暗黙的な働きかけや、相手のことを暗黙的に受け入れている反応など、暗黙的な相互作用が多く見出された。それらの特徴として、見知らぬ相手との間では生じがたいと推測されるもの、遠くにいる相手に大声で呼びかけるもの、リズムカルに働きかけるもの、相手の意思にかかわらず相手の参加を前提にした働きかけ、相手の参加を暗黙的に了承しているものなど、その暗黙的な相互作用から子どもたちの間にある仲のよい関係を読み取ることが可能であった。

なお、暗黙的な働きかけは、一旦理解され、受け入れられると、相互作用に途切れない“自然な流れ”が生み出され、仲間との活動が盛り上がる要素を持ち合わせている（隅田 [松井]、2003）。このことは、長時間に渡って仲間との相互作用や活動を共有する可能性を高め、仲間との結びつきを強めることによって、仲間関係の構築に貢献していると言える。仲間との暗黙的な相互作用に注目することは、仲間関係の様相を把握する一助となる。

(4) 偶然性、当然性、自然な流れ

近くに来たという“偶然性”、近くにただで働きかけを行うことに違和感のない“当然性”、暗黙的な相互作用が生み出す途切れない“自然な流れ”は、相手との親密度が深まるほど（不特定多数の仲間から、一緒に遊びたい仲間、さらに、一緒に遊ぶことの多い仲のよい関係へと進んでいくほど）結合する可能性

が高くなると言える。そして、この偶然性、当然性、自然な流れの結合は、仲間との相互作用を持つ機会、盛り上がった活動を共有する機会を増やし、仲間との親密度を深め、仲間関係の構築に寄与している。

(5) 一時的な相互作用の断続的つながり

相互作用の開始場面の流れとして、仲間への働きかけに対して、仲間の反応があり、それを受けた相互作用の結果がある。働きかけに対して、仲間に承認され、働きかけた本人もその場に残って相互作用を続ければ、結果として仲間とともに行う活動が成立する。しかしそのプロセスは、いつも切れ目のない連続的なものであるとは限らない。一時的な相互作用が断続的につながって、最終的に仲間と一緒に活動することになる場合もあり得る。その際、幼児は自分が現在活動の拠点としている遊び集団から自由に行き来しており、そのとき活動をともにしていない仲間への働きかけが可能になる。そうすることで、さまざまな仲間と相互作用する機会を得ている。遊び集団という枠から外れた相互作用、とりわけごく一時的なものは見過ごされがちであるが、幼児の仲間との相互作用、および仲間関係を捉える上で取り入れるべき視点であろう。

5. 今後の課題

本研究では、一緒に遊ぶことの多い仲のよい関係がすでに出来上がっている子ども同士の事例を基にしたが、お互いに全く未知の状態から仲間との関係性が深まる様子を縦断的に追いつつ検討することや、あまり一緒に遊ぶことのない相手同士の分析と比較検討する必要がある。そのことにより、仲間関係構築に寄与する要因を統合し、仲間関係が形成されていくプロセスを時系列に沿って捉えることが可能になるだろう。

参考文献

- 才賀 敬・渡辺弘純(1994)『4歳児の遊び』労働旬報社。
- 隅田(松井)愛奈(2003)「幼児の仲間との相互作用の開始場面における暗黙の方略」『お茶の水

- 女子大学人間文化論叢』、第5巻、179-188頁。
- 高橋たまき (1984) 『乳幼児の遊び』 新曜社。
- 松井愛奈 (2001a) 「幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連」『教育心理学研究』、第49巻、第3号、285-294頁。
- 松井愛奈 (2001b) 「仲間との相互作用のきっかけにおける転換と一貫性 —子ども2人の3年間の縦断事例をもとに—」『保育学研究』第39巻、第2号、59-65頁。
- 松井愛奈・無藤隆・門山睦 (2001) 「幼児の仲間との相互作用のきっかけ：幼稚園における自由遊び場面の検討」『発達心理学研究』、第12巻、第1号、195-205頁。
- Asher, S. R., Parkhurst, J. T., Hymel, S., & Williams, G. A. (1990). Peer rejection and loneliness in childhood. In; S. R. Asher., & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. Cambridge, England/ Cambridge University Press.
- Black, B., & Hazen, N. (1990). Social status and patterns of communication in acquainted and unacquainted preschool children. In; *Developmental Psychology*, 26, 379-387.
- Corsaro, W. A. (1979). 'We're friends, right?': Children's use of access rituals in nursery school. In; *Language in Society*, 8, 315-336.
- Corsaro, W. A. (1981). Friendship in the nursery school: Social organization in a peer environment. In; S. R. Asher., & J. M. Gottman (Eds.), *The development of children's friendships* (pp.207-241). New York/ Cambridge University Press.
- Corsaro, W. A. (1985). *Friendships and peer culture in the early years*. Norwood, NJ Ablex Publishing Corporation.
- Forbes, D. L., Katz, M. M., Paul, B., & Lubin, D. (1982). Children's plans for joining play: An analysis of structure and function. In; D. Forbes., & M. T. Greenberg (Eds.), *New directions for child development: Children's planning strategies* (pp.61-79). San Francisco/ Jossey Bass.
- Garvey, C. (1984). *Children's Talk*. Cambridge, MA/ Harvard University Press.
- Holmberg, M. C. (1980). The development of social interchange patterns from 12 to 42 months. In; *Child Development*, 51, 448-456.
- Kupersmidt, J. B., Coie, J. D., & Dodge, K. A. (1990). The role of poor peer relationships in the development of disorder. In; S. R. Asher., & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood* (pp.274-308). Cambridge, England/ Cambridge University Press.

- Ladd, G. W., Price, J. M., & Hart, C. H. (1990). Preschoolers' behavioral orientations and patterns of peer contact: Predictive of peer status? In; S. R. Asher., & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood* (pp.90-115). Cambridge, England/ Cambridge University Press.
- Putallaz, M., & Gottman, J. M. (1981a). An interactional model of children's entry into peer groups. In: *Child Development*, 52, 986-994.
- Putallaz, M., & Gottman, J. M. (1981b). Social skills and group acceptance. In; S. R. Asher., & J. M. Gottman (Eds.), *The development of children's friendships* (pp.116-149). New York/ Cambridge University Press.
- Putallaz, M., & Wasserman, A. (1989). Children's naturalistic entry behavior and socio-metric status: A developmental perspective. In; *Developmental Psychology*, 25, 297-305.
- Sawyer, R. K. (1997). *Pretend play as improvisation*. New Jersey/ Lawrence Erlbaum Associates.
- Shibasaka, H. (1988). The function of friends in preschoolers' lives: At the entrance to the classroom. In; *Journal of Ethology*, 6, 21-31.
- Shugar, G. W., & Bokus, B. (1986). Children's discourse and children's activity in the peer situation. In; E. C. Mueller., & C. R. Cooper (Eds.), *Process and outcome in peer relations* (pp.189-228). London/ Academic Press.
- Van Lieshout, C. F. M., Cillessen, A. H. N., Haselager, G. J. T. (1999). Interpersonal support and individual development. In; W. A. Collins, & Brett Laursen (Ed.), *Relationships as Developmental Contexts. The Minnesota Symposia on Child Psychology*, vol.30 (pp.37-60). London/ Lawrence Erlbaum Associates Publishers.

謝 辞

観察をさせていただきました幼稚園の先生方や園児の皆さまに、心より感謝いたします。